

作品展望

昭和文学

下

進藤純孝

品展望

昭和文学

下

進藤純孝

著者紹介

進藤純孝 (しんどう・じゅんこう)

大正11年(1922)1月1日、東京に生まれる。小・中学時代を愛媛県で過ごし、旧制一高文科から東大文学部を経て同大学院(倫理学専攻)修了。文芸評論家。現在、日本大学芸術学部教授、立教大学一般教育部講師。

主要著書・評論に「芥川龍之介」(河出書房新社)、「志賀直哉論」(新潮社)、「伝記川端康成」(六興出版)、随想に「ジャアナリスト作法」(角川書店)、「日本の青春」(毎日新聞社)、「ロシア三人旅・七色の風船」(集英社)等がある。

作品展望昭和文学(下)

昭和五十二年九月十五日 発行

著者 進藤 純孝

発行者 佐藤紀久夫

発行所 時事通信社

東京都千代田区日比谷公園一―三

郵便番号 一〇〇

電話 東京(五九一)一一一

振替 東京四―八五〇〇〇

印刷所 太平印刷社

定価 一〇〇円

落丁本・乱丁本は
お取り替えいたします。
©進藤純孝 昭和五十二年

作品展望昭和文学(下) 目次

第四部 虚脱変転

『播州平野』——宮本百合子

『赤蛙』——島木健作

『灰色の月』——志賀直哉

『焼跡のイエス』——石川 淳

『墮落論』——坂口安吾

『桜島』——梅崎春生

『聖ヨハネ病院にて』——上林 暁

『競馬』——織田作之助

『年年歳歳』——阿川弘之

『踊子』——永井荷風

『夏の花』——原 民喜

『肉体の門』——田村泰次郎

『厭がらせの年齢』——丹羽文雄

『草を刈る娘』——石坂洋次郎

『深夜の酒宴』——椎名麟三

九

一四

一七

一九

二三

二五

二六

三三

三三

三六

三六

四一

四四

四六

四九

五三

『斜陽』——太宰 治

『五勺の酒』——中野重治

『雪の宿り』——神西 清

『こういう女』——平林たい子

『紅顔』——藤原審爾

『虫のいろいろ』——尾崎一雄

『テニヤンの末日』——中山義秀

『晚菊』——林 芙美子

『あぶら照り』——徳永 直

『野狐』——田中英光

『足摺岬』——田宮虎彦

第五部 呻吟呻喚

『千羽鶴』——川端康成

『猟銃』——井上 靖

『本の話』——由起しげ子

『武蔵野夫人』——大岡昇平

『天皇の帽子』——今 日出海

番

毛

六

查

六

六

セ

查

六

六

六

全

六

查

六

六

二三

『遙拝隊長』——井伏鱒二

『おはん』——宇野千代

『愛の渴き』——三島由紀夫

『青電車』——永井龍男

『戸の前で』——十和田 操

『真空地帯』——野間 宏

『極光のかげに』——高杉一郎

『壁』——安部公房

『広場の孤独』——堀田善衛

『冥府山水図』——三浦朱門

『ガラスの靴』——安岡章太郎

『落穂拾い』——小山 清

『鳳仙花』——川崎長太郎

『張徳義』——長谷川四郎

『或る“小倉日記”伝』——松本清張

『二十四の瞳』——壺井 栄

『第一期修道生』——小谷 剛

『獵師と兎と賭と』——きだ・みのる

一〇四

一〇七

一〇九

一一三

一二五

一二八

一二二

一二三

一二六

一二九

一三三

一三五

一三七

一三九

一四三

一四五

一四八

一五二

『壁の中の風景』——小山いと子

一五

『黄金分割』——石上玄一郎

一六

『吃音学院』——小島信夫

一七

『眞実は訴える』——広津和郎

一八

『遠来の客たち』——曾野綾子

一九

『村のエトランジェ』——小沼 丹

二〇

『プールサイド小景』——庄野潤三

二一

第六部 恐怖諦観

二二

『ある女の死』——伊藤 整

二三

『ひかりごけ』——武田泰淳

二四

『甘い土』——高見 順

二五

『われ深きふちより』——島尾敏雄

二六

『海人舟』——近藤啓太郎

二七

『地唄』——有吉佐和子

二八

『寢覚』——中村真一郎

二九

『女坂』——円地文子

三〇

『檀山節考』——深沢七郎

三一

『人生恐怖図』——正宗白鳥	二〇三
『死者の奢り』——大江健三郎	二〇五
『パニック』——開高 健	二〇六
『娼婦の部屋』——吉行淳之介	二一
『灰色の午後』——佐多稲子	二二
『婉という女』——大原富枝	二六
『パルタイ』——倉橋由美子	二九
『夜と霧の隅で』——北 杜夫	三三
『忍ぶ川』——三浦哲郎	三四
『雁の寺』——水上 勉	三七
『瘋癲老人日記』——谷崎潤一郎	三〇
『告別』——福永武彦	三三
『われはうたへど』	
『やぶれかぶれ』——室生犀星	三三
『薔薇いろの霧』——丸岡 明	三八
『山陰』——木山捷平	四二
『沈黙』——遠藤周作	四三

あとがき 昭和文学の行方

索引

二七

二六

第四部

虚脱
変転

——歴史の上では、昭和二十年八月十五日正午に日本の朝明けがはじまっている。歴史の時計の針も確實に朝の時刻をさしていたが、見わたすかぎり周囲は真暗であつた。

とは、野口富士男の「真暗な朝」の一節である。

野口が、青山光二、井上立士、田宮虎彦、十返一（肇）、船山馨、牧屋善三、南川潤ら同世代者と、青年芸術派を結成したのは、昭和十五年の秋。

銀座街頭で通行中の女性が「お袖を短くいたしましょう」「パーマメントはやめましょう」と注意を受けたりしたのはその年のことで、

——青年は農村か工場で生産に従事するか、戦場に出て銃を執るものであつて、芸術は国民の戦意を昂揚させる手段としか考えられぬようになっていった。そういう時代に、私たちはあえて、その「青年」と「芸術」という二語を組み合わせて、青年芸術派という小集団を結成した。

と野口は書いている。新雑誌の創刊は禁じられており、同人八名の合著という形で、短編集「青年芸術派」を出版したのが、翌十六年四月。そして、八ヵ月後の十二月八日、「のちに太平洋戦争と呼ばれるようになった大東亜戦争」が始まる。

「いつはてるともしれない戦争の中にしか自分の未来がないのだというおもひは、まだ青春といえる年代

——これから自分の人生がはじまろうとしている年代におかれていた私にとって、涙も出て来ないほどつらいものであった。泣いてすむことなら甘いものだという考え方が、その時分の私にはあった」

という野口の述懐は、そのまま同じ世代の者たちに通じるものであったろう。

文学が国民の戦意を昂揚させる手段としか考えられぬ時代に、文壇にあえて登場しようとするれば、時代に迎合するしかない。その迎合を拒みつづけることが、ようやくになし得る反抗であり、むしろ勇氣と胆力の要ることだった。発禁、発行不許可と苦難の連続の果て、青年芸術派の活動も昭和十八年をもって閉じることになる。

それから敗戦への急斜面。終戦となって「暗い夜」はたしかに翌けた筈だが、「見わたすかぎり周囲は真暗」の中に、呆然立ちつくしていた人は少なくない。

昭和十七年七月に、「岬の氣」が「文芸推薦」（第五回——第一回は織田作之助の「夫婦善哉」）となった野村尚吾も、野口と同じ世代であり、直ぐ眼の前に高見順、太宰治を見て、続くか越えるかを仕事の張りにした新作家の一人である。

が、「暗い夜」を通り抜け、思ってもみなかった夜明けが訪れたというのに——太宰治や坂口安吾らが待ちかねたように旺盛な筆を執り、椎名麟三、梅崎春生、野間宏、さらには大岡昇平、武田泰淳、三島由紀夫といった新人が続々登場して来たというのに、「暗い夜」に新作家となった連中の筆は、苦渋に閉ざれ、再出発しかねて這えずっていた。

長い暗い時代のうらみつらみを、国家が悪いんだ、軍が悪いんだ、戦争が悪いんだと、気楽にぶつけられたのは、戦場という極限状況から解放されるとか、戦時生活とは無縁の閉塞状況から解き放たれると

か、ともかく戦後が戦中とは地続きでなかった人たちである。

けれども、終戦といっても、戦中の昨日の続きであり、昨日を自分の責任で超えたと同じように、戦後の今日もまた自分の責任で渡るより術のない、まことにふんぎりのつけ難い状況の中に自身を見出した作家たち、たとえば野口富士男とか野村尚吾といった「暗い夜」の世代は、

「見わたすかぎり周囲は真暗」

の中に立ちつくすほかはなかった。

終戦という時代否定を、そのまま自己否定としてひきずらねばならなかった——夜明けにもかかわらず、「暗い夜の私」をひきずって歩かねばならなかった新作家たちを路傍の小石のように無視して、「雨後のタケノコのようにぞく出した」雑誌に乗り、戦後文壇がめざましく動きはじめたことを見すごすわけにはいくまい。

「新潮」が昭和二十年十一月の復刊。翌二十一年一月には「人間」「新小説」「近代文学」、二月には「別冊文芸春秋」、三月には「新日本文学」、四月には「世界文学」、十月には「群像」が創刊され、そのほか「新文芸」（二月）、「三田文学（復刊）」（二月）、「芸林閒歩」「東西」（四月）、「進路」「大地」（五月）、「芸術（季刊）」、「世代」（七月）、「批評（復刊）」、「文芸季刊」「高原（季刊）」（八月）、「素直」（九月）等を加えると、文芸雑誌はまさに春を待ちかねた一斉の開花である。

——戦争がすんだとき、人々は嵐のあとの枯葉のように散り散りにちらばっていた。やがてそれが何十万、何百万となく、東京をさしてあつまった。そのなかの五枚か六枚の葉にも比すべき人間が、見えな
い糸にむすばれて、互いに牽引し、たちまちひとつの聚合体を形づくってしまった。もし神のような存

在があつて、はるかな高みからこれらの光景を見おろしていたとすれば、一体、どんな氣持をいだいたことだろう？

とは、「近代文学」の創世記を語る本多秋五の文章（『物語戦後文学史』）である。

「五枚か六枚の葉にも比すべき人間」——佐々木基一、荒正人、埴谷雄高、平野謙、本多秋五、山室静、小田切秀雄らが、「見えない糸にむすばれて、互いに牽引し、たちまちひとつの聚合体を形づくつてしまつた」のが、「近代文学」であつた。

「七人の侍」によつて創刊された「近代文学」について、本多は次のように書いている。

——現在の読者には、よく呑み込めぬことかも知れないが、出発当初の『近代文学』同人は、誰かの言葉をかりていえば、「蔵原惟人と小林秀雄を重ねてアウフヘーベンする」方向を望んでいた。おれたちは、蔵原惟人も小林秀雄も、ともに理解することができず。しかし、そのどちらでもない方向へぬけ出て行きたい、と考えていた。言葉に出していえば、そうとでもいう外ない方向を望んでいた。実際また、小林秀雄と蔵原惟人は、敗戦にさき立つ時代と、そのもう一つ前の時代と、あわせて十五年間ほどにわたる、日本文学の二大陣営の代表的理論家であり、この二人を直接の手がかりとすることなしには、日本で文芸評論の新しい道が考えられなかつたのである、と。

つまり、本書の上巻で触れた「昭和文学」の戦前、それも太平洋戦争という「暗い夜」に突入してしまふまでの十五年間が、プロレタリア文学派と芸術派に分れながら、「文芸上の左翼」としてはいずれも解答を中止せざるを得なかつた問題を、戦中五年間の空白の後に受け継ぎ、そこに戦後文学の跳躍板を見出そうとしたわけだ。

こうして戦後文学の旗手を自負した「近代文学」は、創刊の翌年には、野間宏、中村真一郎、福永武彦、加藤周一、花田清輝、大西巨人、平田次三郎、久保田正文を加え（小田切秀雄はその年脱退、さらに二十三年には、椎名麟三、梅崎春生、武田泰淳、安部公房、島尾敏雄、関根弘、斎藤正直、青山光二、原民喜、中田耕治、亀島貞夫、高橋幸雄、高橋義孝、寺田透、船山馨、日高六郎、三島由紀夫、原通久の参加を得て、まさしく戦後文学の一大坵城の観を呈した。

こう言えば、いかにも華やかだが、国破れた焼土の灰燼に、華やかさなどあろう筈はない。敗戦の凄寥を秘めた文学的衝迫が、虚脱の中に灯をかけるまでには、幾多の辛苦、変転があり、さきにも触れたように、波に乗り兼ねた戦前の新作家たちを置きざりにする冷酷もまた必要であつたか。

『播州平野』 ● 宮本百合子

——大気は八月の真昼の炎暑に燃え、耕地も山も無限の熱気につつまれている。が、村じゅうは、物音一つしなかった。寂として声なし。全身に、ひろ子はそれを感じた。八月十五日の正午から午後一時まで、日本じゅうが、森閑として声をのんでいる間に、歴史は、その巨大な夏を音なくくつたのであつた。東北の小さな田舎町までも、暑さとともに凝固させた深い沈黙は、これまでひろ子個人の生活にも苦しかったひどい歴史の悶絶の瞬間でなくて、何であつたろう。

聴きとりにくいラジオ放送で無条件降伏を知った瞬間を、作者はこう語っている。「身内が顫えるよう